

三つのシュタイナー学校卒業生調査の 主要結果について

Some Results and Comments of three Surveys of Waldorf Graduates

今井重孝
Shigetaka IMAI

はじめに

OECDが、2000年から開始し以後3年ごとに行われているPISAテストの結果がよいということで世界的にフィンランドの教育が注目を集めている。フィンランドの教育が成功している秘訣として、様々な指摘がなされているが、われわれの調査結果に基づく仮説では、今や世界で990校を越えてなお拡がりつつあるシュタイナー学校の教育手法を少なからず取り入れていることが大きいのではないかと、考えている¹⁾。

世界的な新教育運動の流れの中で1919年にドイツで創設されたシュタイナー学校は、1.8年間同じ担任が持ち上がる、2.教科書を使わない、3.点数競争のためのテストはない、4.通知表は数字ではなく、文章や詩によって書かれる、5.原則として12年間同じ学校で学ぶ、など多くのユニークな特徴があることで知られている²⁾。

しかしながら、こうしたユニークな方式の教育を受けて社会に出た卒業生がどんな状態なのか、社会に受け入れられているのかどうか、こうした点についての経験科学的な調査研究としては、従来はホフマンらの調査³⁾がある程度で、シュタイナー学校卒業生の実態は十分に把握されていなかった。ところが、21世紀に入ってから、ちょうど我々が、ドイツのシュタイナー学校のアビトゥアクラスの調査を行った頃から⁴⁾、スウェーデン、北米、スイス、ドイツで大規模な調査がなされ⁵⁾、シュタイナー学校卒業生の統計的な輪郭が明らかとなってきた。

そこで、本小論においては、経験科学的な社会調査に基づき調査結果に基づきシュタイナー学校卒業生から見たワルドルフ教育の主な特徴を把握することを目指す。その際、我々のアビトゥアクラス調査や今までの風評なども考慮しつつ、結果の解釈を行いたいと思う。

1. 北米調査の結果について

(1) フェーズ I

フェーズ I においては、まず、2004年9月に12学年を持つアメリカとカナダの27校のワルドルフ学校に、1995年から2004年までの卒業生の進学先の情報を求めて、2776名の卒業生の進路情報を得ている。また、北米ワルドルフ学校連盟から1995年から2004年までの4376名の大学入学者（卒業してからしばらくして入学したものも入学年で見ている）の情報を得ることができた。この情報に基づいて、卒業生の進路、進学先についての調査を行ったものがフェーズ I の調査である。

この主な調査結果は以下のようであった。

- ・2004年だけを見てみても、438名の卒業生が、342の異なった大学に進学している。10年間のスパンで見るとカーネギー分類の20類型のうち18類型の大学に進学しており、717校に及んでいる。ワルドルフ学校の卒業生が進学していないのは、ロースクールやインディアン居留地の大学のように専門化した大学のみである。
- ・10年間の進学実績の人数の多い10校は、オバーリン大学（82名）、バード大学（72名）、カリフォルニア大学サンタクルーズ校（57名）、コロラド大学（56名）、ハンプシャ이어大学（55名）、ルイス&クラーク大学（48名）、アーサム大学（45名）、サラ・ローレンス大学（45名）、スキドモア大学（44名）、カピラノ大学（43名）となっている。カリフォルニア大学サンタクルーズ校とコロラド大学を除けば、あとは小規模のリベラルアーツ大学である。
- ・10年間の合計での上位10校と2004年度の上位10校を比較すると4校が入れ替わっている。バード大学、ハンプシャ이어大学、スキドモア大学、カピラノ大学が抜けて、パゲットサウンド大学、マウントホリオク大学、サンフランシスコ州立大学、ウィリアメッテ大学が入ってきている。この変化は、ワルドルフ学校の増加により地理的な分布が変化したことと、卒業生を受け入れた経験が蓄積されてきていることが影響していると推測される。
- ・ワルドルフ学校の卒業生の22.8%が卒業後すぐに大学進学しないで回り道をして進学している。この割合は、とりわけカナダのワルドルフ学校卒業生に多く見られる（48%）が、カナダでは、一般に少し別の経験をしてから大学に進学することが奨励されておりオンタリオ修了証書があらかじめそうした経験を要求しているということがあるからと見られる。

以上の結果から見たうえで筆者なりに、その理由を推測してみよう。

- ・まず、このように特定の大学に偏らないで多様な大学に進学しているという結果を見ると、名門狙いではなく、自分にあった大学に進学しようとしているワルドルフ学校の卒業生の進学動機が見えてくるといえるのではなかろうか。
- ・また、大規模大学にも進学しているが、リベラルアーツ大学への進学が多いことから、専門教育より一般教養教育のほうを重視している傾向がうかがえるわけであるが、このことは、ワルドルフ学校のカリキュラム自体が専門化をできるだけ避けて、12学年まで原則的に、幅広く共通の科目を学んでいることと関わりがあるのではなかろうか。狭い世界に閉じこもらないで幅広い分野に対して興味を持つ卒業生像が推測できよう。

- ・回り道の理由については、今回の調査が、そこまで細かく聞いていないので、全くの推測になるが、社会のシステムに合わせて行動するというよりは、自分のやりたいこと、自分の人生設計に従って、社会のシステムを手段として用いるという傾向の強い卒業生の特徴を暗示していると思われる。
- ・フェーズⅠの調査においては、直接卒業生に質問しているわけではなく、学校や連盟に問い合わせるので、それぞれのワルドルフ学校で記録されていること、北米ワルドルフ学校連盟で記録されていることしかわからないので、元のデータに不備があると調査報告書自身が述べている。今回は、学校や連盟経由の調査であって、本格的な内容に踏み込んだ卒業生調査は、フェーズⅡの調査に委ねられている。

(2) フェーズⅡ

2004年の調査時点で、北米にワルドルフ学校が37校あり、その中で2004年に12学年の卒業生を出しているのが30校あった。そのうち27校が第一フェーズに参加し、26校が第二フェーズに参加した。最初、1994年、1996年、1998年、2000年、2002年、2004年の卒業生をそれぞれ6人ずつ住所と電話番号とeメールアドレスを連絡して欲しいと2005年の9月半ばに26校にメールを出した。しかし、すぐに返事をくれた学校は少なかった。卒業生の三つの完全な連絡先の情報を確保するのは難しかった。しかしながら、各校が懸命に努力してくれたおかげで、2005年の12月末には、約500のeメールアドレスが確保できた。そこで新年に最初のアンケート協力への招待メールを500名に送った。しかしながら、10%しか返事が来なかった。そこで、はがきを出したり、電話があれば電話をかけたりして、オンライン調査の頁へのリンクを各回答者に連絡し、そこへの書き込みがない場合には、2度3度とリマインダーの依頼メールを送った。こうした試みの結果約250名の回答が得られ、回答率はほぼ50%であった。そこで対象を広げ、1994年から2004年までのすべての卒業生を対象としさらに1994年以前のできるだけ多くの卒業生を対象とした。この結果897名の卒業生が対象となった。アンケートに同意したのは556名であり、2006年4月30日にオンライン調査が打ち切れ、分析対象となりうる十分な回答を寄せたのは523名であった。これがフェーズ2の段階の基礎データである。

以上のデータに加えて、卒業生の行っていた大学の教授に対してワルドルフ学校の卒業生のユニークな特性について自由記述のアンケートをしている。100名以上に依頼して45名から回答が得られた。また20名の雇用者に対してもアンケートが試みられた。

さて、それでは、主要なアンケート結果を見てみよう。以下の記述は、データについては、報告書から取り、解釈については基本的に筆者がデータから読み取った解釈を示す形で記述していく。従って、解釈は、報告書のものではないので留意されたい。

1) 大学での専門領域

回答者のうち大学進学者のパーセントは94%であり、ほとんどが大学に進学していた。そのうち

で専門領域を尋ねた結果は、芸術と人文科学が39.8%、社会科学と行動科学が29.9%、生命科学が9.9%、物理学と数学が2.8%、エンジニアリングが1.8%、コンピュータと情報科学が2.5%、教育が2.1%、ビジネスと経営が4.6%、健康が5.6%、職業的・技術的が0.7%であった。この数値を、1991年から2002年の間のアメリカの全国調査と比較してみると、生命科学は、アメリカのデータが6.2%なので、ワルドルフ学校の卒業生のほうが3.7%多く、物理学と数学においても、ワルドルフ学校の方が、0.8%多くなっている。教育は、逆に、アメリカのデータの方が7.3%と5.2%多くなっており、社会科学と行動科学については、アメリカのデータ10.9%に比べて19%多くなっている。

確かに、芸術や人文科学において、アメリカデータより3倍近く多くなっているが、生命科学や物理学、数学への進学者が少ないわけではなく、社会科学や行動科学の領域では、逆にワルドルフ学校の卒業生のほうが3倍近く多くなっている。他方、ワルドルフの卒業生は教育系が多いと思われ込んでいるところがあるが、この調査では、むしろアメリカデータの方が3倍以上になっている。ただし、ビジネスや経営の領域においては、アメリカ・データの方が4倍以上に多くなっている。また、技術的な領域に関しては、エンジニアとコンピュータと情報科学、を合計すると、ワルドルフの卒業生で4.3%、アメリカ・データで12.5%であり、アメリカのほうが3倍近く多くなっている。

以上の結果を見ると、単純に芸術系や教育系が多く、理系が少ないとは言えず、むしろ、応用科学よりも純粋科学の方に興味が傾いているように見える。この傾向性は、フェーズⅠでの調査結果にあった、リベラルアーツ系大学への進学が少なくないということとも連動しているように思われる。

2) 大学教授によるワルドルフ学校卒業生の評価

(1)問題解決、(2)イニシアチブ、(3)倫理的標準、(4)判断、(5)真実を語る、(6)コミュニケーション、(7)リーダーシップと効率、(8)社会意識—他者への配慮の8項目に対して、5段階評価が求められた。1が低く5が高くなっている。それぞれ、この順に平均点が、4.6、4.8、4.6、4.4、4.7、4.7、4.4、4.8と極めて高くなっていて、すべての領域において、最高に近い評価が得られている。この調査結果は、ワルドルフ学校の卒業生が、教える側の視点から見て、問題解決能力に優れ、イニシアチブを発揮し、倫理観もあり、判断力にも優れ、真理に対する畏敬の念があり、コミュニケーション能力にも優れ、リーダーシップもあり、他者への思いやりにも優れている、ということを意味している。これは、受験勉強やテスト勉強をしないといわれる教育が、結果的に、ホリスティックな人間形成機能を果たし、問題解決力や、判断力、真理探究への姿勢といった点でよき大学準備教育になっていることを示す有力なデータであるといえよう。もちろん、回答数の少なさや、解答した教授の偏りがあるかもしれない。従って、さらに詳細な調査が望まれるところではあるが、しかし、4割程度の回収率で、この平均点なのだから、全体的に高いという傾向性は、かなりの確率で確からしいといえるのではないか。

フェーズⅢの報告書において長きにわたってワルドルフ学校の卒業生を教えた経験者の教授のコメントが2頁にわたって掲載されているので、その内容を紹介し、教授から見たワルドルフ卒業生の特徴を例示してみよう。

1950年代に大学教授になって以来、大学をめぐる環境は実に変化に変化を重ねてきているが、そ

の中で、ワルドルフ学校の卒業生たちは、1950年代から今日に至るまで私の授業に安定的な影響を折に触れて与えてきた。ワルドルフ学校の卒業生たちは、時代の急激な変化、価値観の変化、流行の変化に左右されず他の学生とは異なる独特の特質を示していた。彼らは、例外なく、人々に対して心を砕き、創造的で、しっかりとした自分なりの価値観を持ち、ユニークな発言をする学生たちであった。動物実験に関しては常に、動物に苦痛がないかを気に留めるのだった。また、歴史を見る場合にも、常に、その時代に生活していた人々の生活や文化に目を向けるのだった。(Phase III p.112-3)

時代に流されない共通の資質を持っているということは、極めて重要な指摘であると思われる。人に対してさらには動物に対しても思いやりがあり、自分なりの判断力を持ち、創造性に富む、というのは、まさに「変化の激しい時代」において生きていく人間に共通に必要とされる資質ではないか。そして、その資質を安定的に育てているということは、大学での勉強にとってよき準備教育であるというのみならず、現代という時代において生きていく上でも優れた準備教育になっているといえるのではないだろうか。

3) ワルドルフ卒業生の職業選択

・ワルドルフ学校を卒業してすぐに就職するかあるいは大学を途中で中退するかした回答者は59名(11.7%)であった。彼らに仕事への関係について、5段階評価(よくないから素晴らしいまで)をしてもらったところ、54名が回答し、そのうち、88.9%が「大変良い関係」あるいは「素晴らしい関係」であると答えている。

高卒就職者の90%近くが、自分の仕事との大変良い関係を維持しているというのは、注目すべき結果であると思われる。日本的な観点からすると全く驚くべき数字である。しかし、自分のやりたいこと自分の向いていることを重視して職業を選び大学に行くかどうかを選ぶという生き様からすれば、不本意就職しているわけではないので、当然の結果というべきかもしれない。少なくとも、ワルドルフ学校の卒業生は、自分のやりたい職業を第一優先順位にしており、まずは、ひとまず大学を出ておこうといった発想が少ないことが読み取れる。

・今度は、全員を対象とした調査結果であるが、仕事環境において何が重要と考えているかを、「全く重要でない」から「非常に重要である」にいたる5段階評価をしてもらったものである。その結果を平均数値で見ると、全体で最も重要であるとされたものは、「職場の雰囲気」(4.6)で。回答者の94%が重要と判断していた。次に、「職業の倫理原則」(4.3)と「他者を助ける機会がある」(4.3)が高い評価となっており、回答者の82%が重要と判断していた。そのあと、「自分自身の考えを入れられる機会」(4.2)、「仕事での自信」(4.2)、「他者との接触」(4.2)、「自分の子どもとの両立可能性」(4.2)となっている。「高所得」については3.1と低く、回答者のわずか26%が重要と判断しているに過ぎない。

この結果から見て、ワルドルフ学校の卒業生は、一般に、給料の高さよりも、職場の雰囲気、職業倫理、他者の役に立つ、自分の考えを活かせる、自信を持てる仕事、他者とのつきあいなど人間関係的な要素が高く評価されていることがわかる。

4) ワルドルフ卒業生のニュースに対する興味

・卒業生に対して、地方ニュース、全国ニュース、国際ニュースのそれぞれに対する興味関心について、5段階評価（1. 全く興味がない、2. 少し興味がある、3. 適度に興味がある、4. 非常に興味がある、5. 極端に興味がある）をしてもらっている（回答者492名）。その結果、平均値で見ると、地方ニュースが3.1、全国ニュースが3.8、国際ニュースが4.2となり、国際ニュースへの興味関心が高いことがわかった。また、1943年から93年の間の卒業生と1994年から2005年の卒業生を比較してみると、前者の場合、「4. 非常に興味がある」と「5. 極端に興味がある」を合計すると、地方ニュースでは、51%、全国ニュースでは、75%、国際ニュースでは、76%であるが、後者の場合、同様の合計で見ると、地方ニュースでは、70%、全国ニュースでは、44%、国際ニュースでは、73%となっており、国際ニュースへの関心は、いずれの年齢層でも高いのに対して、若い層において全国ニュースよりも地方ニュースへの関心のシフトが起こっていることが明らかとなった。

こうした結果は、ワルドルフ学校の卒業生が国際的な動きに対して高い関心を抱いていることを示しているといえよう。

5) ワルドルフ学校の卒業生と一般的な生活経験

・今回のアンケート調査では、一般的な生活経験に関連して、1. これまでの人生の中であなたにとってもっとも偉大な贈り物は何でしたか？ 2. これまでの人生の中であなたにとってもっとも大きな挑戦は何でしたか？ 3. 何があなたに人生の最大の喜びを与えてくれましたか？ という三つの問いが自由記述の形でなされた。自由記述を項目別に分析した結果がフェーズⅡの報告書の52ページの表7-3に示されている。それを見ると「最大の喜び」に関しては、1. 家族(193名)、2. 友人関係・人間関係(164名)、3. 芸術実践(135名)、4. 他者の手助け(92名)、5. 自然(89名)、6. 職業生活・仕事(42名)、6. 学術活動(42名)、8. 身体活動(33名)、9. 内面生活の発展(32名)、10. 旅行(32名)であった。

報告書の解説によれば、映画を見たり、テレビを見たり、コンピュータ・ゲームをしたり、買い物をしたり、ドライブしたりといった内容はほとんど見られなかったという。

こうした結果を見ると、人生の喜びは、まずは人間関係において得られ、ついで、芸術、仕事、学問といった自己の活動に見出されており、受動的な娯楽や物質的な娯楽は低い位置に置かれており、精神的な喜びや活動的な喜びが高く評価されていることがわかる。

6) ワルドルフ学校の教育経験

・自由記述の質問として、「あなたの受けたワルドルフ教育を思い返してみても最初に思い出すのは何でしょうか？」という質問がなされた。この質問に対して、自由記述を整理した結果が報告書の54ページの表8-2に掲載されている。この結果は次のようであった。

1. 自己の発達(96名)、2. 社会的・コミュニティー(86名)、3. バランス・包括性(80名)、4. 安全・庇護の感情(74名)、5. 知的成長(49名)、6. 多様性(19名)、7. 自由(16名)、8. 批判的な意見(23名)

報告書の分析は次のように述べている。

「一般的に、ワルドルフの卒業生は、自分の受けた教育に対して、顕著な暖かさと愛情を示す。多くの卒業生が、この質問を、ワルドルフ学校、そこの先生、ワルドルフ教育に出会わせてくれた人々への感謝を表明する機会としている。自分のワルドルフ体験に批判を述べている生徒の中にさえ、感謝と尊敬の色合いを帯びてコメントを述べているものがある。学校体験に対して全く否定的なものは、ごく少人数である。」

「ワルドルフ体験を振り返ったとき、大学への準備が不十分だったと感じた学生は少ない一方で、大学への移行の準備は十分すぎるほどだった、と述べる学生もいる。」

「全体として、回答者の多数は、ワルドルフ学校を、暖かい感謝の気持ちで思い出している。——ある卒業生が表現したように、『山間に柔らかな黄色の太陽が沈む中に、素晴らしい記憶が息づいている』」

筆者の2009年9月のドイツのワルドルフ学校卒業生へのインタビューでも感じたことであるが、卒業生は「小さなところで批判はあるけれど、全体としてみれば、とても美しい思い出、素晴らしい思い出だ」と異口同音に述べていた。

もちろん、少数ながらも、ワルドルフ学校体験に対して、批判的な卒業生がいることも、忘れられてはならない。すべての生徒にとってふさわしい教育というのは、教師自身が完全ではないことを思うとき、到達不可能な理想であるのかもしれない。しかしながら、これらの卒業生に対して、詳細な追加インタビューなどを行うことにより、シュタイナー教育をよりベターなものにする努力はなされなくてはならないであろう。

7) ワルドルフ学校卒業生へのワルドルフ教育の影響について

ワルドルフ教育の影響を37項目について、卒業生に5段階評価をしてもらった結果の表が、報告書の59ページの表9-2に掲載されている。主要なものについて結果を見てみよう。4(非常に影響があった) + 5(この上ない影響があった) のパーセントで肯定的評価を、トップの5項目と最後の5項目を示すと以下のようであった。

1. 創造的能力(87%)、2. 言語的表現(84%)、3. 学習への愛(79%)、4. 他者に見解を述べる(69%)、5. 自信(69%)、33. 体育的能力(24%)、34. 政治的方向付け(23%)、35. 人智学への関心(22%)、36. 競争を処理する(21%)、37. 病人の世話をする(14%)

創造性に関しては、大学教授の評価とも符合している。言語で自己を表現する力についても教育の影響が大きいと判断されている。これは、物語を耳から聞く機会が多いことや通知表が文章で書かれていて個人的な特徴を詩で現したものを特に低学年では受け取ることも関連があるのかもしれない。学習への愛は、学びの楽しさを十分経験していることと対応していよう。他者に自分の見解や態度を説明する力も、言語的自己表現力と通じるものがあるろう。自信があるというのは、われわれのドイツ調査の結果とも符合している。

768名の在校生に対するわれわれの調査結果では、79%が自己を信頼しているとの結果であった(今井、2006:16頁)。卒業生と在校生、Selbstvertrauenとselfconfidenceのニュアンスの違い、ド

イツと北米の違いなどがあるので、単純な比較には慎重であるべきであるが、いずれも自己への信頼感や自信が養成されていることは共通しているといえよう。

他方で、体育的能力、政治的方向付け、人智学への関心、競争の処理、病人の世話については、影響を受けているものが少なく25%以下となっている。とりわけ、人智学については、影響を受けていないもののパーセントが48%と高く、「人智学を学校で教えてはならない」とするシュタイナーの教えが守られているからだと推測される。体育的能力の影響が小さいのは、通常の運動競技よりも、オイリュトミーやボトマー体操によってからだの動きを訓練しているので、運動競技的な体育に関しては影響が少ないと判断しているのだと推測される。また政治的方向付けについても、多様な判断や価値の多様性や寛容さに重点が置かれていて、特定の政治的な立場が教えられるわけではないことと関係があるのではなかろうか。競争の処理への影響が少ないのは、非競争的協力的な風土の中で教育を受けているから当然の結果ともいえよう。病人の世話については、具体的に学習しているわけではないので、影響が少ないのはある意味当然と思われる。

以上、推測が多くなっているが、今後の検討の際の一つの仮説にはなりえると思われる。

2. ドイツ調査の結果について

(1) はじめに

ドイツ語圏調査については、二冊の本が出版されている⁶⁾。1冊は、スイスの調査で、もう一冊はドイツの調査である。質問項目は、両方とも同じであるが、後者の調査結果は、2004年の終わりに、3500名に対してアンケートが送られ、2005年3月までに1124名から回答が送られてきた（回収率32.1%）。1939年から1942年までに誕生したグループ、1946年から1949年までに誕生したグループ、1969年から1972年までに誕生した年齢グループの三つに分けて調査がなされていること、各年齢グループから8名ずつ選んで個別に話し合いを行っている、各年齢グループから2グループずつ選んでグループ・ディスカッションもしている、という点で今までにない調査となっている。ちなみに前者の調査は、1200人にアンケートが送られ622名が回答した（回収率51.8%）。1919-1938年の間に誕生したグループ、1939-1954年の間に誕生したグループ、1955-1978年の間に誕生したグループに分けて分析が行われている。ここでは、後者の主な分析結果を取り上げることにしたい。

(2) 両親が子どもである自分にシュタイナー学校を選んだ理由⁷⁾

この問いは自由記述の形で問われたものである。その結果は、

- | | | |
|-----------------------|-------|-------|
| 1. 広い意味での教育的動機を挙げたものが | 46.3% | でそのうち |
| 2. 公立学校への不満を挙げたものが | 19.3% | |
| 3. 人智学を挙げたものが | 11.3% | |
| 4. 家族の伝統を挙げたものが | 8.3% | |

5. 勧められてあるいは接触してみて 4.7%

となっている。人智学を挙げているものの割合は11.3%とそれほど多くはない。しかも、年齢別に見てみると、若い年齢グループの回答者の両親のほうが学校選択における人智学の重要性が減少している。それに対して教育学動機の方は、若い年齢グループの両親のほうが重要性を増している。教育的動機とは、たとえば、シュタイナー教育学、音楽的芸術的教育、学力への圧力がない、不安のない学習、点数圧力がない、責任感のある人格へと形成してくれる、などである。2番目の公立学校への不満としては、姉が公立学校でひどい経験をしたから、ギムナジウムにおける教員交代のあとの集団的な学力へのプレッシャーや腹痛、公立学校でのお試し期間において病弱として入学を許可されなかった、公立学校以外の学校を探していた、私の感受性が鋭かったから、私が馬鹿だったので、私は晩成型だったので、といった記述である。これらの記述を見ると、公立学校に適応できなくてワルドルフ学校に入学する生徒も少なくないことがわかる。ワルドルフ学校の卒業生の大学進学率は公立学校より高いことが知られているので、公立学校をあぶれた子どもたちも入学してくるにも関わらず、選別されて入学するギムナジウムと比較しても大学入学資格試験の点数がまさるとも劣らないことは、特筆すべき特徴といえよう。

以上の結果全体の傾向としては、人智学のような思想的な理由よりも、公立学校の教育への不満とか、教育の方法の魅力が両親のワルドルフ学校選択の主要な理由であることがわかる。

(3) 卒業生が修得した職業

ワルドルフ学校の卒業生の修得した職業の多いほうの10の職業を、ミクロ国勢調査と比較した結果は、次のようであった⁸⁾。

	卒業生調査	統計局の2000年調査
教師	15.5%	3.2%
エンジニア	10.5%	2.6%
精神科学と自然科学の職業	10.1%	0.8%
その他の健康関連の職業	9.2%	4.8%
医者・薬剤師	8.2%	1.2%
芸術家	7.7%	0.9%
社会扶助的職業	6.9%	3.2%
商品販売	6.8%	8.4%
事務職	5.1%	12.5%
法律職	3.5%	0.6%

この表から、まず、目立つのは、エンジニアや医者・薬剤師といった理系の職業において、ワルドルフ学校の卒業生は、国勢調査の平均に比較して、より多くなっているという点である。エンジニアでは4倍、医者と薬剤師では6倍以上になっている。従来、ワルドルフ学校では芸術が重視されていて自然科学はないがしろにされる傾向があるので、文科系の職業が多いと予想されていた。

ところが、この調査では、この予想とは異なる結果が示されたのである。ワルドルフ学校の卒業生は自然科学や技術系に進もうとする者も少なくないのである。

芸術家が多いのは、従来から指摘され予測されていたことであるが、教師が国勢調査に比較して5倍近く多くなっており、社会扶助的職業も2倍になっているのは、人間に関わる仕事を選好する傾向が現れていると見られる。共感力が高いこととも関連があると推測される。事務職や商品販売が少なくなっているのもそれと関連があると思われる。

(4) 職業につく場合に重視している項目——1981年調査との比較⁹⁾

今回の調査	1981年調査
1. 自分の傾向性にあった職業	1. 自分の傾向性にあった職業
2. 職業との一体感	2. 自立的な仕事である
3. 活動が興味深い	3. 活動が興味深い
4. 職場の雰囲気のよさ	4. 他者との接触がある
5. 自分の責任で仕事ができる	5. 収入の高さ
6. 自分の考えを入れられる可能性がある	6. 自分の考えを入れられる可能性がある
7. 自立的な仕事である	7. 職場の雰囲気のよさ
8. 他者との接触がある	8. 一般的に役に立つ
9. 何かを成し遂げることができる	9. 他者を助ける
10. 自分の業績が認められる	10. 安定した職場

まず、今回の結果から見てみよう。順位の低いものを五つ挙げると、20. 尊敬されている職業、21. 収入の高さ、22. 昇進の見込みがある、23. 一生同じ職業で働く、24. 早い出世の見込みがある、となっている。通常世間的に高く評価されそうな項目が低い評価となっており、むしろ仕事の内容や充実感やりがいいといったものが重視されていることがわかる。1981年調査と比較すると、収入の高さが5番目であったのが今回の調査では、むしろ非常に低く評価されているのが目に付く。これは、1981年調査の対象者が戦後の経済的に苦しい時代を経験していることと関連があると推測される。安定的職場が比較的高くなっているのも経済的事情を反映していると推測される。とはいえやはり自分にとってふさわしい職業、他者の役に立つ職業が選好されていることから、他者への共感力や思いやりが高いという傾向性も見られる。ある程度経済的に発展していれば、自分に相応しい生きがいのある職業につきたいというのが、ワルドルフ学校卒業生の職業意識であるといえそうである。

(5) 人生の方向付けに関するもの——トマス・ゲンジッケ論文に依拠して¹⁰⁾

ゲンジッケは、卒業生アンケートの中の28の質問項目をヴァリマックス回転により分析して、卒

業生を次の三つの型に分類した。

1. 文化志向型……………博物館、劇場、良書を読む、講演会に行くといった項目が高い卒業生
2. 人間関係志向型……他者のために何かしたい、役に立ちたい、愛されたい、手仕事といった項目が高い卒業生
3. 快楽主義型……………スポーツ、テレビ、性、といった項目が高い卒業生

その上で、この類型ごとに回答がどのように違っているかを分析した。

典型的な結果をいくつか見てみよう。

	文化志向型	人間関係志向型	快楽主義型
倫理的な側面			
一般に役立つ職業	3.0	3.0	2.6
他者を助ける職業	3.0	3.0	2.6
職業での倫理的原則	3.2	3.0	2.5
物質的なものと自由			
職場の安定性	2.6	2.8	2.9
十分な自由	2.3	2.5	2.6
収入の高さ	2.2	2.3	2.6
昇進の見込みがある	2.2	2.3	2.6

* 数字は、重要でないを1、非常に重要を4にして評価したものの平均値（S.114）

職業選択における倫理的な要素の評価においては、文化志向型と人間関係志向型はほぼ同じだが、快楽主義型は低くなっている。物質的なものや自由への評価については、ちょうどその逆で、快楽主義型が高めで、文化志向型と人間関係志向型は、低めになっている。そうした傾向性は価値観の傾向性として想定できる結果ではあろうが、ワルドルフ学校の卒業生の中にもこのような価値観の違うグループが存在しており、異なった評価をしているということが判明したことは特筆すべきことと思われる。

快楽主義型の卒業生たちは、ワルドルフ学校の教育のあり方にも厳しい目を向ける傾向があり、自分の子どもをワルドルフ学校にやるかどうかについても相対的に低い値になっている。しかしながら、ワルドルフ学校で快適だったかという項目については、ほとんど違いは見られなかった。

ワルドルフ学校は、こうした快楽主義的な価値観の登場に対して、どのように対応していったらよいかということも考えていかなければならない。時代の変化とワルドルフ学校の理念をどのように調停していくかといった問題も今後ますます現実的な問題となっていく可能性があるかもしれない。

(6) ワルドルフ学校での体験について¹¹⁾

ワルドルフ学校に関する一般的な言明に関して、70%以上の比較的高い評価を受けている項目は、

1. 公立学校で失敗する生徒もワルドルフ学校では授業を受けている。89.4%
2. ワルドルフ学校で実践されているエポックによる主要授業は意味がある。87.6%
3. ワルドルフ学校はすべての生徒に対して均等な機会を与えている。76.5%
4. ワルドルフ学校で実施されている8年間の担任持ち上がり制はいいと思う。74.1%
5. ワルドルフ学校は世界のすべての宗教に開かれている。73.1%
6. ワルドルフ学校は、その内容において強力にシュタイナーの人智学に方向づけられている。
73.0%

7. ワルドルフ学校では、8年生まで点数を用いないということに共感できる。72.7%

の7項目である。卒業生は、エポック授業や、8年間の担任の持ち上がり制、点数のない教育におおむね満足していることがわかる。また教育の機会均等や公立学校でやっていけない子どももワルドルフ学校ではやっていっていることも了解している。また教育内容が人智学の影響を受けていることは認めているが、他方で、世界の宗教にも開かれた教育がなされていることも認めている。とはいえ、少数とはいえ、それに賛成しない卒業生もいることは留意すべきであろう。どんなにすぐれた教育であっても、すべての生徒にとって優れた教育であることは難しいことが改めて了解される。

学校の受容と学校との一体感については、帰属感があるとするものが、87.3%、心地よいとするものが86.3%、保護されていると感じるものが79.2%と高くなっている。ワルドルフ学校は保護空間として機能しているといえるだろう。これに関連して、自分は教師に真面目に取り扱われていると感じたものが、84.5%、学校で教師の承認を得ていたとするものが82.7%と高くなっている。授業に関連して高く評価されているのは、創造的な能力への影響が87.8%、自分の意見や立場を他者に対して主張する能力への影響が75.3%と高くなっている。ワルドルフ学校の生徒は、何よりも、創造性や自己主張の訓練を受けていると、卒業生は感じているのである。

3. スウェーデンのシュタイナー学校卒業生調査の結果¹²⁾

(1) はじめに

スウェーデンの調査結果については、現在のところスウェーデン語で発表されており、英語でのサマリー論文しか私が読み解けるものはないのであるが、このサマリー論文は、なかなか要領よく結果をまとめているので、この論文に依拠して、調査結果のあらましを整理した上で、筆者なりのコメントを付すことにする。

(2) 高等教育におけるシュタイナー学校の卒業生

a) シュタイナー学校の卒業生は、親の学歴が低くても大学に行く割合が高いという結果がでている。これは、筆者の推測するに12年間同じ学校で進級していくこと、原則的に同じクラスメン

パーで進級していくことが影響していると思われる。学力別に分けられたりせずに全員の個性が尊重される形で教育が為されていることも影響していよう。通常、親の学歴の低さは子どもの学歴の低さに影響を及ぼすと考えられているが、シュタイナー学校では、そうした影響をなくせる力が働いていると見られる。

b) シュタイナー学校の卒業生は、他の学生に比べて、就職機会を改善することよりもその教科自身への個人的な興味に基づいて深く勉強する傾向がある、という結果が出ている。これは、シュタイナー学校では、点数をつけるテストをしないこと内発的な動機付けを重視していることの成果であると思われる。

c) シュタイナー学校の生徒は、大学の環境において幸せでうまくやっているという結果が示されている。そのなかでも自然科学の学生のほうが社会科学の学生よりもより一層幸せでうまくやっている。ほとんどすべての学生が、大学の要求は適正なレベルであり十分その要求に応じられる、と判断し、約三分の一の学生は同級生に比べてよりうまく対処していると判断している。

以上の結果からして、シュタイナー学校は、十分な大学への準備教育をしていると著者のダーリンは述べている。

(3) ワルドルフ学校と市民道徳的能力

1998年の教育の全国教育評価のための国家調査機関の質問項目を借りて調査がなされているので、シュタイナー学校の生徒と公立学校の生徒の比較が可能になった。この質問項目は、1) 現在の社会的道徳的問題を同定し説明する能力、2) これらの問題への解決を提起する能力、3) 提起された解決策を実施する能力、からなる「市民道徳的能力」を調査するもので、社会科の市民道徳的側面を扱ったものである。この比較により以下の結果が明らかとなった。

a) ワルドルフ学校の生徒の方が、より社会的責任、道徳的責任を感じている。

b) ワルドルフ学校の生徒の社会問題、道徳問題への関与は、9学年と12学年を比較すると年齢が上がるにつれて増加しているようにみえる。

c) ワルドルフ学校の生徒は、ナチイデオロギーや人種差別主義を押しとどめたり制限したりする方法を、より多く提起している。

d) ワルドルフ学校の生徒の方が、より肯定的な自己イメージを抱いている。

e) ワルドルフ学校の先生のほうが、人間の尊厳、平等、環境をより重要と感じていると生徒は回答している。

f) ワルドルフ学校の生徒は、いじめられていると感じるものが少ない。

g) 社会を逸脱するグループに対してもワルドルフ学校の生徒の方が、より寛容な態度である。

h) 男女の態度差もワルドルフ学校のほうが小さくなっている。

以上の結果から、スウェーデンにおいて公立学校とワルドルフ学校を比較すると、ワルドルフ学校の方が市民道徳教育がなされているという傾向が示されたといえる。著者のダーリンは、ワルドルフ学校の教授方法と生徒の両親の影響の二つを挙げ、どちらか言いしたいが、いずれにせよ、教

授方法も少なからぬ影響を及ぼしているに違いないと述べている。

(4) スウェーデン語、英語、数学、と勉強への態度

このテーマに関する質問項目は、2003年の全国教育評価のための国家機関調査の一部を使用している。そこで、ワルドルフ学校の9学年生493名と公立学校の21208名のデータが比較された。その結果は、以下のものであった。

- a) 一般的にワルドルフ学校の生徒の方が幸福である。
- b) ワルドルフ学校の生徒の方が、学校での勉強についてより肯定的なイメージを抱いている。
- c) ワルドルフ学校の生徒は、テストに合格するためだけに学校の教科を勉強することが少ない。
- d) 一般的に、授業での学習環境は、ワルドルフ学校の方が、とりわけ数学の時間において、より静かで集中した授業がなされている。
- e) ワルドルフ学校の生徒の方が、数学に対してより肯定的な態度を示している。
- f) ワルドルフ学校の生徒の方が、スウェーデン語を公立学校の生徒よりも難しくないと思っている。
- g) ワルドルフ学校の生徒の方が、三つの教科に対する具体的な問題を処理する能力においては公立学校の生徒に比べて自信を持っていない。
- h) スウェーデン語、英語、数学の点数に関しては、ワルドルフ学校と公立学校の生徒の間にほとんど差が無かった。

以上の論文に示された調査結果に対して、筆者の考え方を以下述べる。

以上の結果の中で、g)において、ワルドルフ学校の生徒の不得意な点があげられている。教科の具体的な問題とは、日本でもよくあるように、教科書や問題集に掲載されているような問題であると推測される。こうした問題は、ワルドルフ学校では、それほどやらないので、不得意なのはある意味当然といえる。しかし、(2)の大学への準備についての調査結果において、ワルドルフ学校の生徒は、公立学校の生徒に比較して大学での勉強への十分な準備をしていることが示されていた。ということは、大学での勉強が伸びるような能力をワルドルフ学校の生徒が身につけているということを意味している。とすれば、教科書の問題やテストの問題が解けるということ、あるいはこうした問題に慣れているということは、必ずしも、高度な勉強を進める基礎力を養成しているとはいえないことを示していて興味深い。

(5) おわりに

以上のスウェーデンの調査結果から明らかなように、ワルドルフ学校の生徒は、公立学校の生徒に比べて、大学への優れた準備教育を行っており、市民道徳的能力形成についても公立学校よりも優れた成果をあげており、スウェーデン語、英語、数学のテストの点数に関しては、公立学校とワルドルフ学校に差がないが、ワルドルフ学校の方が、それぞれの教科に対して肯定的な態度を示している、ということが明らかとなった。

このスウェーデン調査により、シュタイナー学校の生徒の力が、公立学校の生徒の力に比較して、勉強の面でも徳育の面でもまさるとも劣らないことが示されたことの意義は大きいと筆者は考えている。

4. 三つの調査結果を検討して

職業の進路などは、ドイツと北米では多少違いがありそうであるが、大雑把な傾向性を見るならば、ワルドルフ学校の卒業生には国を越えた以下のような共通の特徴があるように見える。

- (1) 大学への準備教育としては優れた成果をあげている。
- (2) 職業の選択理由も、給与や威信などの世間的な基準よりも自分のやりたい仕事、やりがいのある仕事、興味のある仕事を選ぶ傾向がある。
- (3) 理系に進む学生が特に少ないということはない。
- (4) 自分に対する自信、自己信頼感が強い。
- (5) 学力のみならず、共感力や思いやり社会性においても優れている。
- (6) ワルドルフ学校での学校生活に対してとてもいい思い出を持っている。
- (7) 自分の子どももワルドルフ学校に通わせたいとする卒業生が少なくない。
- (8) 人智学的な職業に就く卒業生は多くはない。

もちろん、ワルドルフ学校といえども完璧ではないので、様々な問題点が指摘されているし、卒業生の中には、非常に否定的な評価をしている者もないわけではない。それは、ワルドルフ学校の教師も人間である以上、完璧ではありえないから、すべての生徒を満足させることは不可能かもしれない。とはいえ、否定的な評価の内実をよく調査して学校の更なる改善に生かす努力も怠ってはならないであろう。

最後に、年齢別や卒業生のタイプ別データ分析がなされているドイツ調査の結果において、とりわけ感じたことであるが、時代の変化とワルドルフ教育の真髄との調整の問題がこれからの最大の課題となるかもしれない。

注

- 1) 今井重孝 2009「ホリスティックな視点の重要性」今井重孝編 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B) 平成18年度～平成20年度『大学ユニバーサル化時代のける中等教育の再定義——積み上げ型システムの転換』4-13頁
- 2) 今井重孝 2005 「シュタイナー教育とシュタイナーの思想」神尾学編著『未来を開く教育者たち——シュタイナー・クリシュナムルティ・モンテッソーリ……』コスモス・ライブラリー
- 3) Hoffmann,U./Prümmer,C./Weidner,D. (Hrsg.) 1981 Forschungsbericht über Bildungslebensläufe ehemaliger Waldorfschüler. Eine Untersuchung der Geburtsjahrgänge 1946 und 1947, Stuttgart において、1946年生ま

れと1947年生まれのシュタイナー学校卒業生の調査結果が報告された。

- 4) 今井重孝(研究代表者) 編 2006 平成15年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究成果報告書『シュタイナー学校のアビトゥアクラスに関する研究』
- 5) Dirk Randoll/Heiner Barz (Hrsg.), 2006 Bildung und Lebensgestaltung ehemaliger Schüler von Rudolf Steiner Schulen in der Schweiz—Eine Absolventenbefragung, Peter Lang で報告されている調査では、1200人にアンケートが送られ622名が回答した(回収率51.8%)。1919-1938年の間に誕生したグループ、1939-1954年の間に誕生したグループ、1955-1978年の間に誕生したグループに分けて分析が行われている。Barz, Heiner/Randoll Dirk (Hrsg.) 2007 Absolventen von Waldorfschulen—Eine empirische Studie zu Bildung und Lebensgestaltung, Verlag für Sozialwissenschaften で分析されている調査は、2004年の終わりに、3500名に対してアンケートが送られ、2005年3月までに1124名から回答が送られてきた(回収率32.1%)。1939年から1942年までに誕生したグループ、1946年から1949年までに誕生したグループ、1969年から1972年までに誕生した年齢グループの三つに分けて調査がなされている、各年齢層グループから8名ずつ選んで個別に話し合いを行っている、各年齢グループから2グループずつ選んでグループ・ディスカッションもしている、という点で今までにない調査となっている。北米調査として、Baldwin, Faith·Michell, David 2005 Research on Waldorf Graduates in North America, Research Institut for Waldorf Education; Mitchel, David/Gerwin, Douglas 2007 Survey of Waldorf Graduates Phase II; Mitchel, David / Gerwin, Douglas 2008 Survey of Waldorf Graduates Phase IIIがある。PhaseIでは、北米の21校のシュタイナー学校で卒業後の進路調査がなされ、そのうちの15校には訪問調査もなされた。Phase IIは26校の12学年卒業生550人に調査が行われた。Phase IIIでは、他の調査との比較が行われている。
- 6) Randoll, Dirk/Barz, Heiner (Hrsg.), 2006 Bildung und Lebensgestaltung ehemaliger Schüler von Rudolf Steiner Schulen in der Schweiz—Eine Absolventenbefragung, Peter LangとBarz, Heiner/Randoll Dirk (Hrsg.) 2007 Absolventen von Waldorfschulen—Eine empirische Studie zu Bildung und Lebensgestaltung, Verlag für Sozialwissenschaftenの二冊である。
- 7) Randoll, Dirk 2007 ,Eckdaten der Fragebogenerhebung In: Barz, Heiner/ Randoll, Dirk (Hrsg.) 2007 S.41ff.
- 8) Bonhoeffer, Anne/Brater, Michael 2007 Berufliche Entwicklungen ehemaliger Waldorfschüler In: Barz, Heiner/ Randoll, Dirk (Hrsg.) 2007 S.59
- 9) aa.O. S.88
- 10) Gensicke, Thomas 2007 Lebensorientierungen In: Barz, Heiner / Randoll, Dirk (Hrsg.) 2007 SS.101-131
- 11) Randoll, Dirk 2007 Die Zeit in der Freien Waldorfschule In: Barz, Heiner / Randoll, Dirk (Hrsg.) 2007 SS.175-235
- 12) スウェーデンでの調査は、2002年の秋から3年計画で調査が開始され、第一調査では、「高等教育におけるシュタイナー学校の卒業生」をテーマとして、第二調査では「シュタイナー学校と市民道徳能力」をテーマとして、第三調査では「スウェーデン語、英語、数学の知識と勉強への態度」をテーマとして調査がなされた(Dahlin, Bo 2008 Summary of Swedish Waldorfschools Evaluation Report In: Mitchel, David / Gerwin, Douglas 2008 Survey of Waldorf Graduates Phase III pp.31-44)。